

# 空飛ぶ鉄クジラと國府さん

寺浦 薫(大阪府都市魅力創造局文化課主任研究員)

國府さんとプロジェクトとしてご一緒したのは、2008年3月に開催された『大阪・アート・カレイドスコープ“大阪時間”』でのこと。今はなき大阪府立現代美術センター主催の事業として、北川フラムさんをプロデューサーに迎え、古代から現代まで、大阪が紡いできた長い時(とき)の蓄積にアーティストが思いをはせた作品を市内各所に展示することで、歴史都市・大阪の魅力を発信しようという展覧会でした。展示場所は現美センター以外はすべて大阪の歴史や文化を今に伝える屋内外の特徴的な場所を活用。綿業会館や大阪ガスビルなど大阪を代表する近代建築をはじめ、難波宮跡史跡公園など、大阪ならではの空間で14組のアーティストが作品を発表しました。

作品場所の選定はアーティスト自身が行うのですが、國府さんが選んだのは東横堀川に架かる高麗橋の下、人が入れないようにフェンスで囲われ、動物園の檻の中のごとく、ぽっかりとあいた空間。そこに《ROBO Whale》と題した、背中にエンジンを搭載した全長5mの鉄のクジラを設置しました。國府さんの発想のもとになったのは、縄文時代、東横堀川や船場一帯は海に覆われていたため、このあたりからクジラやイルカの骨が多数出土しているという事実。長い年月にわたる土砂の堆積の結果、現在の海岸線に至っているわけですが、大阪市内中心部はかつては海だったということです。護岸に囲まれた河の上を高速道路が走る喧騒な街なか、そのような太古の絵姿を想像するのはかなり困難な作業ですが、逆に、気候変動などで生態圏が変わってしまい、陸地に閉じ込められて海にもどれなくなったクジラの姿をすぐさま思い描き、作品として構想したところがなんとも國府さんらしく感じます。

そこから物語はどんどん膨らんで、“昔にもどりたい”というクジラの情念が、地層の中で自動車の部品を寄せ集めた結果、鉄のクジラとしてよみがえったけれど、そこはすでに海ではなく砂漠と化していたため、プロペラとエンジンを駆使して海を求めて飛んでいく……。ということで、実際の作品は廃車になったフォルクスワーゲンの車体やブルドーザーのクローラーなどを使って繊細に組みあげられました。そして彼の空想した物語に血肉を与えるべく、展示期間中には実際にエンジンを動かしてプロペラをまわすパフォーマンスも行いました。クジラの背中に乗って、バリバリと轟音を立てるエンジンを何とか滑らかに動かそうとする國府さんに、プロペラが

巻き起こす暴風が容赦なく吹きつけ、それでも必死にエンジンにしがみついて格闘する彼の姿はジブリの映画そのもので、“この人はこのままクジラとともに飛んでいってしまうかもしれない……”と、呆気にとられて見ていた自分を思い出します。夢見て闘う、まさに“少年”そのものでした。

印象的だったのは、クジラの周囲に大量に敷き詰められていた砂を使って、クジラを埋めた後、掘り起こすという“儀式”を展示中に國府さんが行っていたこと。クジラを骨格標本にする際の数年越しの作業を擬似的に儀式として行ったものですが、それによってクジラが自分のストーリーの中で動き始めたのを感じた、とブログで吐露されています。“次第に砂の中に姿を隠していく鉄クジラを見ているうちに、何より私自身の、何か寒々しい申し訳なさに悩まされていた心が落ち着いていくのを感じた”と記す國府さんが実際、何に苛まれ、何に癒されていたのか、当時、展覧会の運営にかまけてじっくり話をする機会を作らなかったことが悔やまれます。

展覧会最終日に記されたブログはこう結ばれています。

“……しばらくすると北側の建物に反射した太陽がクジラの背中を照らした。太陽に追い立てられているかのようだ。

後戻りできない人達、そして自分を。

バカなんじゃないか、皆も自分も。

なんていう想いを吹き飛ばすかのように見失った太陽に向かってプロペラを回したいと思う。”

ロマンチズムとニヒリズムとが誰にも真似できない形で同居し、それでも未来を模索し、行き続けていかざるを得ない私たちに対して「絶望」と「愉悦」を同時に示し続けてくれた國府さん。問題が山積する我々の未来に対し、可能性と不可能性を同時に提案し続けるという、極めて高度で勇氣ある思考と行動を示し続けてくれた同志の喪失はどうあっても心が痛みます。自分たちが何とか引き継いでいかなければ。。

國府さん、本当にありがとうございます。